

史跡勝沼氏館跡

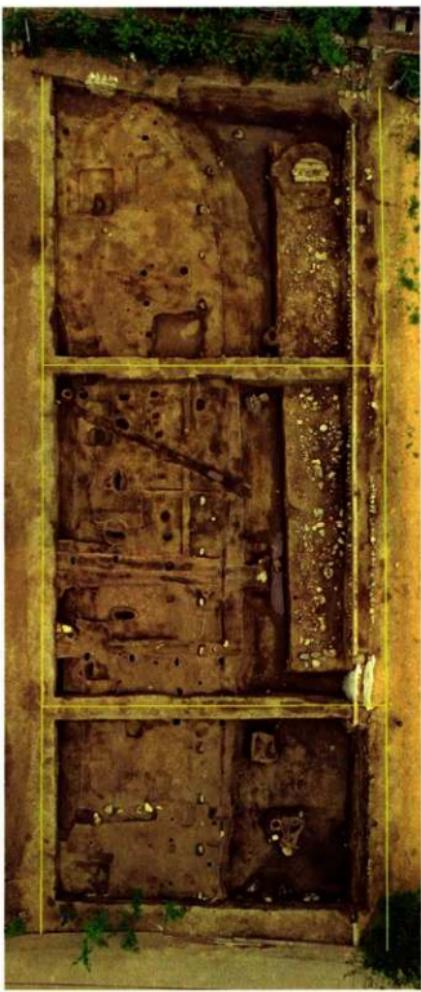
—平成8~17年度外郭域G・F地区発掘調査概報—

2006.3

甲州市教育委員会



1.外郭城H15·H16F地区



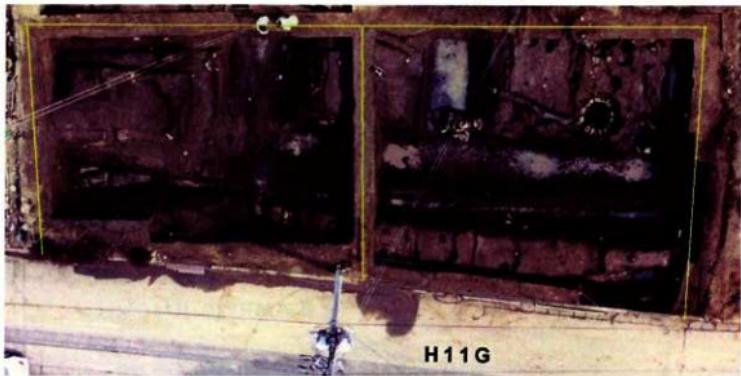
2.外郭城H13G·H14G地区



3.外郭城H12G地区



4.外郭城H10G地区



5.外郭城H11G地区



6.外郭城H9G地区



7.外郭城H8G地区

序

このたび、甲州市教育委員会では、史跡勝沼氏館跡外郭城平成8年度から平成17年度調査概報を発刊することになりました。

本書は、勝沼氏館跡の東郭域で環境整備のための基礎資料を得るために実施したもので、その成果により外郭城保護のための環境整備を行い、公開活用を目的としています。

外郭城の調査では、先の概報で報告したとおり、郭外に造られた掘立柱構造の家臣屋敷や、館の水源となっている深沢用水の旧路が確認されるなど大きな成果がありました。今回の概報はその後実施されたこれに続く東郭内の調査を概報としてまとめてもので、東郭内を通過し、内郭部へ給水する幹線水路の経路や、東郭内に造られた職人工房、内郭部の外堀を埋めて築かれた屋敷地の発見など東郭の性格を示す成果と、館の外郭城の変遷過程などの重要な成果を含んでおります。

今後はこれらの成果を受け調査整備委員会の検討指導を得ながら、環境整備を実施する予定であり、武田氏の史跡を色濃く伝える甲州市の貴重な文化遺産の一つとして公開活用を推進していきたいと存じます。

この調査の実施にあたり、山梨県教育委員会学術文化財課をはじめ関係各位からご指導を頂きました。また、厳寒期のなか直接発掘作業に当って頂いた皆様に謹んで感謝申し上げます。

平成18年3月

甲州市教育委員会

教育長 古屋正吾

例言

1. 本書は、山梨県甲州市勝沼町勝沼に所在する史跡勝沼氏館跡の環境整備事業に伴う資料調査として、平成8年度(1996)から平成17年度(2005)まで間、国・県の補助を受け、勝沼町教育委員会ならびに甲州市教育委員会(平成17年11月合併)が実施した外郭域G・F地区の発掘調査概報である。
2. 本書にかかる調査次は第16次～第26次で、調査区は外郭域H8G地区からH14G地区までとH15F・H16F地区とした。県立ワインセンター進入路の北側一帯にあたり、勝沼氏館跡第2期の縄張りでは東郭内に当っている。
3. 調査区には5mグリッドを設定し、基準点から5mごとに西はE、東はW、北はN、南はSの記号のあとに番号を付し、その交点で机位置を表し、グリッドは南西隅の杭番号で表すこととし、調査区名は昭和52年度に実施された範囲確認調査の地区区分と調査開始年度を組み合わせ、H10G地区などと表記した。
4. 調査に当っては15mごとに幅1mの土層保存用のベルトを表上層から残し実施した。発見された遺構はSGD45などと記号化し、Sは遺構、Gは発見された調査区、Dは遺構種別を表し、これに発見番号を付し表記している。遺構種別は、A=土塁、B=建物遺構、C=広場、D=溝、E=井戸、F=焼土・灰、G=庭園、H=堀、K=土壤、P=水溜、Z=敷石、X=石組・石積とし、柱穴は単にPに番号を付して表すこととした。

目次

序

例言・目次

I. 勝沼氏館跡の概要	1	第6図 外郭域時期別遺構図(1)	20
II. 外郭域の土層	3	第7図 外郭域時期別遺構図(2)	21
III. 調査の経過と概要	4	第8図 外郭域時期別遺構図(3)	22
IV. 遺構	9	第9図 外郭域時期別遺構図(4)	23
1) 中世館以前の遺構	9	第10図 外郭域時期別遺構図(5)	24
2) 中世館の遺構	9	第11図 外郭域時期別遺構図(6)	25
3) 中世館以後の遺構	11	第12図 外郭域遺構重複関係図	26
V. 遺物	12	第13図 出土遺物実測図(1)	27
1) 中世館以前の遺物	12	第14図 出土遺物実測図(2)	28
2) 中世館の遺物	12	第15図 出土遺物実測図(3)	29
3) 中世館以後の遺物	13	第16図 出土遺物実測図(4)	30
VI.まとめ	14	第17図 外郭域遺構図(W9～W21)	
		第18図 外郭域遺構図(W21～W27)	
		第19図 勝沼氏館跡全体測量図	

挿図目次

第1図 勝沼氏館跡位置図	2
第2図 勝沼氏館跡調査地区割図	8
第3図 勝沼氏館跡縄張図(1)	17
第4図 勝沼氏館跡縄張図(2)	18
第5図 勝沼氏館跡縄張図(3)	19

I. 勝沼氏館跡の概要

勝沼氏館跡の発掘調査は、昭和48年12月内郭部調査から始まり、関東地方で初めて石組を用いた遺構の発見により保存が決定され、昭和52年度に範囲確認調査を行い、昭和56年5月に外郭・家臣屋敷・鬼門鎮守社を含む一帯5万平方メートルが国の史跡指定を受け、昭和57年度から平成4年度にかけ内郭部と内郭内堀一帯の環境整備事業を実施、平成4年度から東側外郭域環境整備のため遺跡内容確認発掘調査を開始した。

館跡は、甲府盆地の東端、国中地域と郡内地域を結ぶ笛子峠の入り口に位置し、御坂峠へは黒駒道、大菩薩峠へは萩原道、雁坂峠へは鎌倉街道の伝承を伝える古道（筋道）が分岐する交通上の要の地にある。館は日川扇状地の扇頂部に形成された河岸段丘崖を背に内郭と東郭、北西郭、北郭の4郭を配置しており、東側には河岸段丘面が続き、北東には柏尾山の山裾が迫り、北方から西方にかけ日川扇状地が開けている。

館を取り巻き、上の山・鳥居平の台地上には東に鬼門鎮守の稻荷社尾崎明神、北東には淨泉寺と福徳稲荷社、祈願所海蔵院も文禄元年まではこの台地上にあった。北郭から北方450mの字長遠寺の地には、勝沼氏の位牌、遺品を伝えていたという菩提寺泉勝院、この間に九尺道の小佐手小路（御先手小路）がありその途中に祈願所威徳院があり、西方800mには勝沼氏が奉納した首鎧太刀を伝えていたという産土神雀宮がある。

館については、「甲斐古城跡史」・「甲斐國志」等により武山一族の勝沼氏の館と伝えられてきた。内郭部の発掘調査により郭内には少なくとも3時期以上の改修の跡が確認され、その第2期以降が16世紀の勝沼氏の時代に該当し、15世紀代の第1期については記録伝承等が無いが、建物配置などから甲斐国内でもトップレベルの武家館である可能性が想定されている。

勝沼氏は武田信虎の弟、信友とその子信元の二代の武田親族衆として活躍した武将である。勝沼信友は、永正17年（1520）「鳥目百匹武田左衛門人輔信友、駒一疋太刀一腰當都主護平信有」『岩殿七社権現棟札』が初出で、この段階で郡内領の目付的役であったことが確認され、永正16年8月に兄信虎は新府中の建設を始め、12月に川田館から甲府櫛觸ヶ崎館に移っていることから、ほぼ同時期に国中東部地域の渡りの要として信友により城塞化が進められた可能性が考えられ、大永6年（1526）「武田信虎・勝沼氏信友」『石橋八幡神社棟札』で勝沼氏を名乗っていることから勝沼氏館の成立がこれ以前であることが確認できる。天文2年（1553）「此年武田殿川越殿ノ息女ラムカヒ申候。御供衆中無申計候」「妙法寺記」とあり信虎の嫡男の嫁を川越の上杉氏から迎えるにあたり、郡内領を通る行列が賑々しく行われた様子が記されており、郡内目付けとして信友がその警護に深く関わったと考えられる。天文4年（1553）「此ノ年八月廿二日相模ミノ屋形セイツカイ被食候テ、人数二万四千、御方ハ二千計テ、小山田殿劣ヶ被食候テ、彈正殿・大輔殿・侍者周防殿・小林左京助殿・下ケンタン殿・随分方々打死被食候、殊ニカツノマノ人数以上二百七十人打死申候」『勝山記』・『甲州郡内山中一戦、敵五十人餘人被討捕也』「快元僧都記」とあり山中で北条勢と戦い信友は討ち死にすると共に、この軍勢の中心が勝沼勢であったことがわかる。勝沼氏は嫡男信元の代となり、守護武田家では天文10年、晴信が父信虎を駿河に追い、政権を取る。勝沼信元は、天文14年（1545）「五月廿一日節、相州・羽州瀧崎動」「甲陽日記」・「此ノ年武田春信様ハ信州ノ見野輪殿ノ城ヲ御貢メ候、卯月ヨリ五月、六月マテ御貢メ候、サレトモヲチ不申候、勝ツ沼ノ相州・小山山羽州、河内ノ穴山殿ノ御アツカイニテ和談ニテ御帰陣被成候」『勝山記』とあり、和睦交渉に武田親族を代表し臨み、天文17年（1548）の村上氏との戦いでは「二月、十九日相模ト高白致談合御北様ヘ申上、野村筑前守・春降出雲守兩人陣所ヘ参、御帰陣ノ御意申上ル」『甲陽日記』とあり甲府の留守を預かる立場にいたことがわかる。天文18年（1549）「五月、七日丙子徳役始ノ御談合落着、相州・羽州・勢州三人連判」「甲陽日記」とあり同年「此年ノ霜月武田殿・小山田殿談合被成候て、地下へ悉く過料錢ヲ御懸ケ候」、20年にも「過料錢」「勝山記」のことがみえ、この間の天文19年に大善寺本堂坪根修理の勘定興行が行われ、歳費は「国中之一升勧進株別取之」「柏尾山造営記」としており、晴信、勝沼氏、小山田氏の協議のもと徳役として郡内領に株別一升が課せられ修理が実施された様子を窺うことができる。修理は天文

22年に落慶法要が営まれた。これ以後、勝沼氏の記録は見られなくなり、永禄3年（1560）「逆心の文あらはれて、勝沼五郎との御成敗也、」『甲陽軍鑑』により勝沼氏は滅んだとされ、勝沼氏の同心、被官は跡部大炊助に二百騎、晴信の弟信連に八十騎が再配置されたという。

天正10年（1582）武田氏が滅び、慶長2年（1597）「御所御城跡改発被仰付村中に而仕候」「勝沼古事記」が行われ、以後は水田や畠となり、元和4年（1618）甲州街道勝沼宿の開設により、北郭に接するように甲州街道が設けられ、この両側に宿場の屋敷割りが行われ、大きく改变されていった様子が『元和五年勝沼上組絵図』から読み取れる。



第1図 勝沼氏館跡位置図

II. 外郭域の土層

勝沼氏館跡外郭域の自然地形は、北西方向に傾斜しており、甲州街道を挟んだ北側の字鳥居平、上之山の台地の間には沢状地形が北側の字東から屈曲して入り込んでいる。外郭域一帯の土層は表土層から中世以後の近世近代層、中世館層、中世地山層に分けることができる。

中世館以後の層：外郭域では現耕作土層下から、明灰褐色粘土の水田耕土層と鉄分が堆積した赤褐色粘土の水田床土層から成る旧水田面が1面ないし2面確認することができる。上層水田面は正徳検地の『一筆下絵図』水田面と一致し、さらに『元和五年勝沼村上組絵図』とも一致していることから、下層水田面はこれ以前の水田と考えられ、その下層には素掘りの排水溝や水田造成層が確認できる場所もある。また、中世の堀を埋設した場所では水田床上層が陥没し、これを修復した跡も確認できる。

ぶどう栽培の耕造りに伴う跡や、明治の中央線建設にかかるわる土壤や柱穴などは水田層を掘り込んで造られている。

- L 1-1 暗茶褐色砂質土層で石灰粒を含む表土層
- L 1-2 茶褐色粘質土層で砂粒、石灰粒を含む現耕作土層
- L 2-1 明灰色粘土層 水田耕作土 第1面
- L 2-2 赤褐色粘土層 水田床土層 第1面
- L 3-1 明灰色粘土層 水田耕作土 第2面
- L 3-2 赤褐色粘土層 水田床土層 第2面
- L 4 灰色砂質土層 水田造成層

中世館の土層：近世層と中世地山層の間にある炭化物を含む5cm前後の暗茶褐色土層で、中世段階で盛土造成を行った場所は厚く、中世地山層の上が混じり合った状態で確認され、堀や水路では粘土や砂礫の堆積も見られ、近世水田造成に伴い、中世層がまったく見出せない場所もある。

- M 暗茶褐色土層 炭化物を含む

中世館地山層：中世館構築以前の土層で、茶褐色土粘質土(NC)、黒褐色土粘質土(NB)、黄褐色砂質土(NY)、花崗岩礫層(NK)の順で堆積している。茶褐色粘質土中からは、平安、鎌倉時代の遺物が、黒褐色粘質土中からは繩文時代の遺物が見出せる場所もある。

- NC-1 茶褐色粘質土 砂粒を含む
- NC-2 茶褐色粘質土
- NB-1 黒褐色粘質土 砂礫 鉄分を含む
- NB-2 黒褐色粘質土
- NY-1 黄褐色砂質土 鉄分を含む
- NY-2 黄褐色砂層
- NK 花崗岩礫層

III. 調査の経過と概要

1) 平成8年度調査

調査期間：平成9年1月6日～平成9年3月28日

調査概要：H7G地区で確認された水路SGP02は当初南西端に出水路があったが、中央に石積を行い、半減した時点で閉鎖され、西辺に出水路が新設されたことが明らかになっていた。確認された出水路SGD34は断面台形で、底が二段構造であり、流路部分は流れの方向にさらに段差を伴う構造である。上段底部は中途から始まっており、作業用の通路と考えられる。SGD34の水路底の粘土層中からは多量の木製品、植物遺存体が発見され、從来勝沼氏館跡では不明であった植物性用具の実態が明らかになると共に、木製椀の荒型が伴うことから、近接して職人工房の存在が想定される。水路SGD34に平行して直壁断面の溝SGD42が確認され、この溝に至る流路は無いにもかかわらず底部にはSGD34底部の粘土層と同じ粘土堆積が見られることから、浚渫上の廃棄溝と考えられる。

2) 平成9年度調査

調査期間：前半 平成9年4月1日～平成9年6月30日、後半 平成9年12月15日～平成10年3月31日

調査概要：平成9年度前半期は平成8年度調査区の継続調査を実施し、幹線水路SGD34から多量の木製品、植物遺存体を検出した。調査区内でこの水路は幅5m、深さ2mの大規模なものとなり、さらに改修が行われ、新旧2時期あることが確認された。廃泥処理溝SGD42は幅2m、深さ1mで並行して確認された。なお、大量の木製品類は、炭や灰、多量の木片等と共に一括投棄されたもので一時的に飲料水路としの機能を失わせるような行為の結果で、その直後に廃棄物の上部だけが廃泥処理溝に移され、そのまま水路として使い続け、やや時間が経過し水路全体が堆積物で埋まってから、新路を開削しなおしたという経過がたどれる。出土遺物からは、平成8年度調査で椀の未製品やナタ台、削りカスの発見により本地師の存在が、平成9年度調査区よりこれ以外に漆布、漆が付着した蓋、ヘラなどから塗師、タガ縫め檻、タガ縫めクサビから桶職人、桜皮や剥ぎ板の未製品などから、曲輪職人など多種の職人がこの水路に比較的近い位置に工房を構えていた可能性が想定される。

3) 平成10年度調査

調査期間：平成10年4月1日～平成11年1月31日

調査所見：H9G区では、幹線水路SGD34の北側に漆塗膜断片が散布する一帯が確認され、ここより2間3間の掘立柱建物SGB32、SGB43さらに、2間四方で周囲に土塙を伴う掘立柱建物SGB33、SGB34が発見され、後者が木製品工房、前者が居住棟と想定される。また工房建物の北側から素掘りの井戸が確認され、内部から、削りカス、砥石、桜皮などの小片が多数発見された。H10G区は、H9G区の西隣にあたり、工房領域のテラス面がさらに6m西に及んでいることが確認され、この領域が東西21m南北27m以上の範囲を占めること、さらに井戸の西から北側にあたる一帯から鉄牢および鉄牢を伴う土塙SGK148、焼土土塙が発見され、内部に小銀治遺構と伴うSGB38、SGB47などの2間四方の掘立柱建物が金属加工工房である可能性が想定される。

また調査区を南北に縦断するように、第1期段階の堀SGD56が発見された。この堀は第1期の外郭区画施設であり、平成8年度にH8F区から発見された東西方向の堀SFD01と屈曲して連続すると考えられ、予想される屈曲点は調査区の北側10m以内に存在すると思われる。この堀は内部の堆積状況から流水路とは接続されていないと考えられるが、底部に粘土堆積が見られ、この粘土中より漆椀、箸、下駄、独楽、雪駄、建築材料、山輪軸、調度品などの木製品がゲンゴロイ、タニシなどの水生昆虫の遺骸と共に発見され、堀の南側いずれかの箇所に堀を遮る土橋の存在が予想される。また堀の内部からは手斧の削りカスを袋状の物に詰め、これ

に矛弾を刺したものが粘土層に埋もれた状態で検出され、また堀の屈曲部に近い調査区北隅から、堀の底や壁に密着した状態で完形の小型土師質皿が6点発見されており、特異な出土状況からなんらかの祭祀に使用された可能性が考えられる。

4) 平成11年度調査

調査期間： 前半 平成11年4月1日～平成11年7月9日、後半 平成11年12月1日～平成12年2月29日

調査概要： 第1期の外郭を画す断面逆台形の堀SGD56は上面幅3m～5mで、南に向かうに従い規模を増している。H11G調査区からは第1期外郭の堀SGD56から内側に幅4mの中間土塁を挟み幅3mの小規模な堀が平行してあり、さらにその内側に幅8m以上の土塁の存在が確認され、第1期の外郭防備施設は二重堀、二重土塁を備えていた可能性が高い。また、第1期の郭外家臣屋敷に伴う2基の石積井戸が確認された。第2期以後これらの防備施設は掘削、埋め立てが行われ東郭となり、これらの土塁や堀を切り、水路SGD34が設置された状況が確認された。調査区内でSGD34は若干流路を北側に曲げており、SDG34旧路は堀SGD67の箇所で終息しており、堀SGD67を利用し南に屈曲していたと想定される。なお改修水路SGD34新路はさらに西に続いている。旧路内からはH9G調査区と同様多量の木製品、植物遺存体が発見された。なお、三重環二重亀甲花菱紋を施した漆椀は、勝沼氏が菩提寺泉勝院に収めた品物に付されていた「圈内に花菱を亀甲の上に重ねつたる」『甲斐国志』紋様と一致する可能性が考えられる。

5) 平成12年度調査

調査期間： 平成12年4月1日～平成13年3月30日

調査概要： 第1期の最終段階の外郭東辺の防備施設は、内側から基底部幅8mの土塁SGA02、上面幅4mの内堀SGD67、基底部幅4mの中間土塁SGA03、さらに上面幅5m外堀SGD65から構成される二重土塁二重堀構造の厳重なものであることが確認された。また、第1期の郭外の家臣屋敷は、2間3間規模の主屋と石積み井戸、敷石通路などから構成されており、内郭部第1期が東に正門を備えていることから、上級家臣の屋敷と判断される。なお、第1期家臣屋敷から発見された石積井戸SGE05とSGE06では、掘削深度5mと2mと大きく異なるおり現状の深沢用水の染み出し水が-2mの側壁から湧き出すことから、SGE05も途中で-2m以下を埋設し上部だけを利用する構造変更が行われ、SGE06に改築する時点では2m以上の掘削をまったく行っていないことから、第1A期の途中で深沢用水が開削された可能性が考えられる。第2期の職人工房は居住棟と木製品工房、金属加工工房、井戸、廐棄土塗から構成され、建て替えが頻繁に行われた経過が観察された。H12G調査区では、近現代のめくら排水、土塙、葡萄棚の杭穴等の確認を行い、水田基盤層を除去し、中世最終面まで調査がおよび、土塁SGA02上面および第3B期の南北水路SGD68の上面が確認された。調査に合わせ、堀や水路の堆積土9地点を選び自然科学分析を委託実施した。

6) 平成13年度調査

調査期間： 平成13年4月1日～平成14年3月31日

調査概要： 前年度から継続したH12G地区では、第1期段階の基底部幅8mの土塁SGA02とこれに並行する上面幅5mの内堀SGD67が調査区内を南北に縦断して確認された。堀からは漆椀をはじめとする多くの木製品が検出され、また堀底には4m程の間隔で10～20cmの段差が確認された。土塁は、盛上層が残存しており、この断面観察から16世紀第2期の土塁では盛土が堀に近い部分から行われているのに対し、堀の遠い側から盛土がおこなわれ、しかも、堀に並行するのではなく斜めに行っていることが確認された。第2期以降では、

堀 SGD67 に重複して 2 間 3 間の掘立柱建物が検出された。同規模の建物が H11G で 2 棟重複して発見されており、当初周辺から漆塗膜の断片が多数見つかることから第 3 期の木製品工房建物と考えていたが、周辺にゴミ穴等を伴わないことや、同規模のものが 3 回にわたり建て替かれていることから、第 2 期の木製品の漆塗りなどの仕上げを行う工房ではないかと想定され、これにより工房領域は居住棟、木製荒加工工房、木製仕上げ工房、金属加工工房の 4 棟の掘立柱建物と素掘り井戸、廃棄土壌敷基から構成されていることが明らかになった。H13G 地区では水田層面まで掘り下げた段階で、これまで中世層面までおよぶ葡萄棚の杭と共に、方形で角材を利用した柱穴と明治時代の遺物を多量に含むゴミ穴などが発見されていたが、今回、柱穴が 5 間 8 間の掘立柱建物として確認され、さらに、建物を片付けた廐業上塙からから鉄辛と鉄道用の道具が明治後半期の陶磁器類と共に発見され、井戸名伝承などとして残されていた明治 29 年から 35 年にかけて行われた中央線工事の人倉組の現場事務所・飯場の実態が確認された。また、昭和初期に勝沼町で始めて設置された葡萄栽培用のガラスハウスがあったことが伝えられていたが、コンクリート基礎や水溜め、水抜き井戸、鍛冶炉がガラスやバテ、鉄骨、工具と共に発見され、その存在を確認することができた。

調査に並行し地巾探査レーダー調査を、北面外郭線把握のため旧甲州街道に沿い実施した。この結果、水路や堀の連続関係、現在の深沢用水が北面の防護線を継承している様子や、北郭が西に広がっている状況等を確認することができた。

7) 平成 14 年度調査

調査期間： 平成 14 年 4 月 1 日～平成 15 年 3 月 27 日

調査概要： H13G 地区では前年度に引き続き、近世水田造構面下の中世造構の調査を実施、近世水田造成層面を除去した段階で、調査区の西側隅が南北に長く水田床上層の陥没現象が見られ、堀の存在が予想され、調査区の北半城では砂礫の地山層面が露出し、南半城は盛土造成層面が現れた。中世の最上層造構は H 13 G 地区の南半から東西方向で確認された並行する 3 条の溝で、内部に砂礫の堆積が見られたことから排水溝と考えられる。さらに、この溝に切られ、北側より掘立柱建物造構 SGB53、南側より SGB55 が確認された。建物は第 2 期の郭外家臣屋敷の主屋や東郭職人工房居住棟の柱配置と類似しているが性格を把握するにはいたっていない。さらに両建物の中間より上面を水平にした土台を支えたと考えられ石列が確認されたが大部分が除去されているため規模は把握できなかった。水田層の陥没域は上面幅 7m 深さ 1.5m の堀 SGD112 として確認され、調査区北端で西に屈曲している。堀は当初水が溜まっていたこと、ある時期に、西側半分が砂礫を用いて埋められ、幅・深さも半減させ、さらに一部では大型の石材と用いて水路状に改修し、最終的に埋設された経緯を確認することができた。この結果は、H12G 地区の第 1 期の外郭防護施設が改修されたことに対応している経緯と受け止められ、この堀は第 1A 期の外郭帯内堀りで、その郭側には並行して土壁を伴っていたと考えられる。内部からは、土師質皿、陶磁器と共に漆椀、箸などの木製品が検出された。調査に並行して館出土の中国製陶磁器の国立歴史民俗博物館による調査、愛知県誌に伴う瀬戸美濃産陶磁器の調査が実施された。この結果、館一帯の陶磁器類から窺える中世の変遷過程は以下の段階が想定されることとなった。

第一段階 11 世紀後半から 12 世紀

第二段階 13 世紀後半から 14 世紀前半

第三段階 15 世紀前半

第四段階 15 世紀末から 16 世紀前半

第五段階 16 世紀後半

この内、第三段階が第 1 期、第四段階が第 2 期、第五段階が第 3 期に該当しており、第二段階は平成 14 年度調

査で竪穴状遺構と水田が確認されたが館や房敷遺構があったのかは不明である。第1段階は白磁四耳壺などの高級磁器が発見されているものの遺構は明確でない。

8) 平成15年度調査

調査期間： 平成15年4月1日～平成16年3月31日

調査概要： 東郭の内郭外堀近接地域H13G、H14G地区の調査および実測、航空写真撮影を委託実施し埋戻し作業を行い、その東側H15F区の調査を開始、第1期外郭北辺の内堀と内土塁を確認する。

H13G、H14G地区は館第1A期段階では外郭東辺の内土塁と土堤脇側溝、内堀が調査区を南北に縦断して確認され、調査区北端で西に屈曲が始まっていた。H13G地区の南半で確認された掘立柱建物SGB55は東西柱間が6.5尺で3間以上、南北柱間が9尺の細長い建物で特異な構造から馬屋の可能性を考えられる。また幹線水路SGD34新路は、H14G地区に到達しているはずであるのに、その確認ができないことから、H11G地区とのペルトを除去し、断面で確認作業を行ったところ、堀SGD112に重複するように到達していたことが確認でき、水路と堀の堆積粘土層どうしの切り合い関係であったため、調査では平面的に確認できなかったが、堀底に窪地が発見され、この窪地がSDG34の末端であること、さらにこの窪地に接する南側の堀SGD112の断面に円形のパイプ状施設を埋設した跡あることが確認された。また、この窪地付近より多量に出土していた焼成粘土塊（壁土）や焼けた木材、鉄製燐台も、堀SGD112に伴うものではなく、SGD34新路の末端に投棄されたものである可能性が高くなった。さらに、幹線水路SGD34旧路についても、末端は屈曲していたと考えていたが、同じように樋を埋設したような施設が検出されていたことから、地中埋設の樋により内郭部への飲料水供給を行っていた可能性が高くなかった。この地区的遺構測量と並行し、H13G地区の西側に、館の外郭北辺防備施設を確認するためH15F地区を設定する。H15F区では水田削面を除去した段階で、H13G地区の第1A期段階の東辺内堀が西に屈曲し、H8F地区の堀SFD43に接続することが確認された。これより南側一帯では50cm以上に及ぶ中世盛土造成層が広がっていることが確認されたものの明確な遺構として調査区内では把握できない。なお、調査と並行し、今後の調査整備活用計画策定の基礎資料として史跡全体の地形測量を行う。

9) 平成16年度調査

調査期間： 平成16年4月1日～平成17年3月31日

調査概要： H15F地区の北端で第1期段階の外郭北辺土塁SFA02と堀SFD43が確認されたものの、その南側全域が盛土造成層となっており、その性格を把握するため、サブトレーナーを設定し掘り下げるが、造成層が厚く、しかも下部は堀の堆積土層となっていることが確認されたものの、その範囲が確定できることから、南側に15m四方のH16F地区を設定し、近世水田削上面の調査後、中世遺構面確認を行った。その結果、H15F地区南半は内郭部外堀の屈曲部分に当ること、さらに、ある段階で大規模に堀を埋め立て、H13G地区で確認された掘立柱建物SGB53を東端とする東西棟の大型掘立柱建物SFB10が確認され、この建物を主屋とし、その南東に馬屋と想定されるSGB55を配置した屋敷地に改修されたことが明らかになった。また、この建物は、柱穴内に多量の焼成粘土塊（壁土）が入り込んでおり、火災にあった可能性が高く、H14G地区の幹線水路SGD34新路の木端部分に大量投棄されていた焼成粘土塊（壁土）や焼けた木材などと結びつく家屋と考えられる。また、郭内屋敷地は現状地形を勘案すると東西55m、南北60mほどの範囲が想定された。

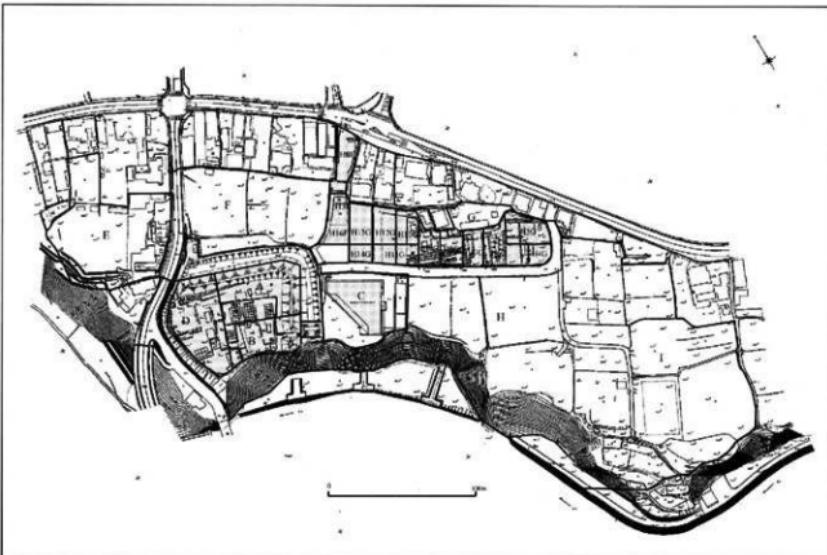
また、館外郭北辺の防護施設については、第1期段階では東辺、北辺とともに近接二重堀構造であったが、第2期以降北辺は、深沢用水を兼ねた堀SFD06と土塁SFA01の一重構造となっており、これに対応する東郭東辺の防護構造として、H7G地区で発見された水溜SGP02が深沢用水路を兼ねた堀、また水溜に並走する水路

SGD37との間に幅6mの土塁が存在した可能性が考えられる。

10) 平成17年度調査

調査期間： 平成17年4月1日～平成17年11月30日

調査概要： 東郭のH15F、H16F地区の調査を前年度から継続実施、確認された遺構の平面図、土層図、断面図を作成し、H15F地区では大型建物SFB10の付属建物の存在を再確認するため造成層面を精査するが背後に建物がなかったようである。また、内郭部外堀SFD46の断面構造を確認するため、サブトレンチを掘り下げるが上部の造成層は強固であるが、堀自体の堆積土が粘土と砂礫層から構成される軟弱土であるためトレチの土壁が崩落することから、底部の確認は断念した。



第2図 勝沼氏館跡調査地区割図

IV. 遺構

1) 中世館以前の遺構

H10G 地区の中世館地山層から 11 世紀後葉の白磁瓜破壊断片、白色の薄手土師質皿が発見されており、この付近になんらかの遺構の存在が想定される。H13G 地区では 12 世紀代の瀬戸鉢皿を伴う豊穴遺構が確認されており、H12G から H13G 地区の北半域では黒褐色粘質土層の上部が鉄分を含み硬化している面が広がっており、硬化面の下部から 14 世紀中葉の瀬戸鉢皿、蓮弁紋碗が出土したことから、これ以後の水田遺構ではないかと考えられる。

2) 中世館の遺構（第3～12図、17、18図）

外郭城 G・F 地区調査で確認された中世館に伴う遺構の重複関係は複雑であるが、土塁や堀、幹線水路などの大規模遺構の重複関係を基本として、先の外郭城 G 地区調査概報で示したとおり 3 期 6 小期の区分することができる。

堀・土塁・郭 調査区内からは南北の SGD56、SGD67、SGD112、南北から東西に屈曲する SFD46、東西の SFD43 の堀と、南北の SGA03、SGA02、南北 SGA05 から東西 SFA02 に屈曲する土塁および土塁の基底部が確認された。

第1期段階の遺構は、当初が SGA05・SGD112 と SGA03・SGD67 の近接二重堀構造で、ある段階で東側にシフトさせ SGA03・SGD67 と SGA02・SGD56 の近接二重堀構造としている。近接二重堀と内郭部内堀との間が外郭帯となる。外郭帯に付随して、堀 SGD56 の南端が途切れている点や土塁 SGA05 の調査区南端で水平な盛土層が検出されたことから、現在のワインセンター取り付け道路下に東門の存在が想定される。内郭部の第1期遺構が東門を正門とする建物配置であることから、外郭東門が第1期段階の館の正門にあたり、門以東の現ワインセンター道路下に正門に至る東西道の存在が想定される。この正門通路以北にあたる今岡の調査区では、15 m～20 m の幅で雄堀状に造成されており、各テラスには掘立柱建築が配置されていることから、正門通路に沿い家臣屋敷群が配置されていた可能性が考えられる。

第2期段階にいたると、北辺を構成する堀 SFD06 と土塁 SFA01 以外は削平ないし埋め立てられ、外郭帯に新たに土塁を伴う内郭部の近接二重堀として堀 SFD46 が設置される。この堀の存在は外郭城 C 地区の調査や外郭範囲確認調査で SH03 としてすでに確認されており、今回はその東辺と北辺の屈曲部分が確認された。内郭部防施設の強化に伴い、外郭の東辺土塁や堀は 35 m 東側に移され、これに第1期の北辺二重日の土塁と堀を延長接続し東郭を形成したと考えられる。新設された東郭の東辺土塁は、県立ワインセンターの取り付け道路を挟み、ずれた位置で確認されており、地下探査で土塁に伴う堀が屈曲し連続している状況が把握されたことから、所謂「かざし」状の虎口を構成していると考えられ、現在のワインセンター道路下に東郭東門の存在が想定される。また、外郭城調査で内郭部外堀が内郭正門外側で鍵の手に屈曲し北西郭を形成していることが明らかになっており、東郭の拡充整備は北西郭の整備と同時に、さらに郭の範囲は確定していないがその北側に存在が確認されている北郭も同じ時期に整備された可能性が考えられ、第2期段階でこの館は、内郭部を近接二重堀で護り、その外側に 3 郭を配置し城砦化が図られたと考えられる。なお、第1期段階の堀は幅が 4 ~ 7.5 m と狭いこともさることながら、堀幅にかかわらず深さが 1.3 ~ 1.5 m と一定であることが特徴的であり、これに対し第2期の堀は、内郭外堀が幅 10.8 m 深さ 3.6 m、内郭内堀が幅 16.2 m 深さ 5.4 m で堀幅と深さが 3:1 の関係にあり、第1期と第2期の堀とでは断面構造の違いが顕著にみられる。また土塁の盛土方法についても第1期では堀の反対側の基底部から、第2期では堀側の基底部から盛土が行われるなど土木技術の違いがみられた。

第3期段階にいたると、内郭部外堀の屈曲部分を埋めたて、郭内尾敷地が設けられている。敷地の規模や、

配置された建物規模からみて、かなり格式の高い屋敷地と考えられるが、堀の屈曲部分は防御の要に当ることから、この部分を埋め立てたことは、この館に城砦としての機能が求められなくなったと考えられる。

なお、第1期の堀内部から、完成直後に投げ入れられた小型土師質皿がまとまって出土したり、袋に木屑を入れ、扇巾を刺したものが沈んで発見されたり、馬の下顎骨が発見されるなど、堀ないし堀に溜まった水にかかる祭祀遺物が発見されている。

水路・井戸 東郭内からは第1期段階の石積井戸SGE05、SGE06と第2期以後の素掘り井戸SGE03、SGK153(SGE07)、SGK156(SGE08)が確認されている。石積井戸は郭外の屋敷地に伴うもので、素掘り井戸は東郭北半の職人工房に伴うものである。館の幹線水路は、郭外の幹線水路(深沢用水)SGD04、SGD05から引き込んでいる。第1期段階の郭内への引き込み経路は明らかにできなかったが、第2A期段階では当初、堀ないし水溜のSGP02の南西端から素掘り水路でワインセンター西側の石積水溜SHP01に入れ、外郭C地区の日川沿いを石積水路で、内郭の外堀は土橋内、内堀は木橋下に設けた木橋で内郭部へ給水していたと考えられ。第2B期段階、水溜SGP02の中央に石積を行い、幅を半減し、新たに出水路SGD34を開削し、その末端から導水管で内郭部に供給していたと考えられる。新設された導水管は新旧2時期の遺構が重複したもので、SGD34旧路は、堀門、流路と作業路の二段底、溜などの特徴的施設を伴っており、さらに並行して廐泥処理溝SGD42が整備されている。第3A期段階ではSGD34旧路を一端埋め、ほぼ同じルートで再掘削しており、さらに旧路より末端を西に12m延長し、導水管で内郭部に給水していたと考えられる。第3B期段階では郭外水路からの取水点を東郭の北東隅付近に変更し、東郭東辺土塁の内側に沿い南下させ、東門の付近から西に屈曲させる流路に変更したと考えられる。

建物 今回の調査で確認された建物はすべて掘立柱構造で、第1期段階では外郭帶東門外の北側に当るW12～W15の間に、第2期段階では東郭北半域に当るW12～W19に、第3期段階になると東郭北半域のW13～W16と東郭内屋敷のW22～W27の二群に分かれて建物群が確認された。

第1期段階ではほぼ曲尺の6尺を1単位とし桁行6、梁行2単位の桁梁共に2単位ごとに柱を立てる南北棟の建物が、石積井戸や敷石を伴って確認されている。W9以東で確認された第1期の建物が2単位四方(2間四方)であることと比べると大規模であり、外郭東門隣接地であることや付属施設が整備されていることなどから上級家臣屋敷の主屋と考えられる。

第2期段階のW12～W19の間に集中する建物群は、

- ① 群の東側にあり南北棟の大型建業SGB32・SGB43
- ② 群の南側中央にあり2間四方で周囲に船底底部の土壠を伴うSGB34・SGB48・SGB33
- ③ 群の北側にあり2間四方で内部に小鐵冶造構や周囲に鉄牢を伴うSGB38・SGB46・SGB47
- ④ 群の西側にある3間2間で周囲に漆塗膜片が見られるSGB49、SGB50、SGB51

の性格構造の異なる4群の建物から構成されている。①は柱の直径が12cm～15cmと第2期の東郭外家臣屋敷の主屋に比べ一回り小型であるが、規模や柱配置法が同じであることから店住用の建物と考えら、この一帯の中心建物と考えられる。②は周囲にある土壠の底で木片圧痕を伴うものが確認されたことから木製品の荒加工を行なう付属建物と、③は小鐵冶造施設や鉄牢から金屬加工にかかる付属建物、④は漆塗膜片から木製品の仕上げに係る付属建物ではないかと考えられる。さらに、この建物群に附まれ素掘り井戸が3基確認されており、この中のSGE03の底から砾石断片、削りカスが発見されたことから工房に伴う井戸と考えられる。この一帯の建物群は機能の異なる建物が計画的に配置され、幹線水路が近接してありながら素掘り井戸を用いるなど独立した環境を備えており、特徴的な出土遺物から館の郭内職人工房であったと考えられる。なお、幹線水路SGD34旧路の内部に大量に投棄されていた木製品の工具、未製品、削りカス類は第2B期段階のSGB33および

より SGK132・SGK131・SGK130・SGK119 の土壌などから供給された可能性が考えられる。

第3期段階の W13～W16 の間の建物は、大型建築 SGB35 や SGB44 の 1 棟だけとなるが、周囲には同時期と考えられる土壌を伴っており、さらに建物内部に水桶を掘えたと考えられる直壁構造の円形、矩形の上層があることなど、同時期の家臣屋敷の居住建物とは異なっており、第2期同様職人工房としての機能を継承した建物と考えられる。W22～W27 の建物群は、郭内屋敷に伴うもので SFB10 が主屋と SGB56 が付属建物と考えられる。主屋は南北に下屋をもつ東西棟建物で、曲尺の 6.01 尺を単位とし、桁行は東から 3、3、2.5 単位ごとに柱が並び総長は 8.5 単位で 3 室構造。梁行は身舎が 7.5、7.5 で南北の下屋が 4.5 単位で総長は 4 単位である。柱穴内の多くは礎板石を伴っており、身舎と下屋、さらに支える機能の違いで柱の位置や柱穴径、深さが異なっており、切り妻構造ではあるが棟持柱構造ではないこと、出入り口ないし窓の位置など上部構造を推定することができる。さらに柱穴の抜き取り穴には加熱を受けたコマイの痕が観察できる壁土が多量に混入しており土壁構造で、火災により消失し、その後、残存していた柱を抜き取る処置が行われたと考えられる。なお、建物の基礎部分から瀬戸大橋第2期前半の灰釉削ぎ丸皿小片が出土している。また、同時期の第3A期段階の幹線水路 SGD34 新路の末端に焼けた壁土や火災にあった建築部材、鉄製蜀台などが発見されており、建物の火災倒壊がここまで及ぶとは考えられず、飲料水路に意図的に投棄されたならば、火災も前の機能を停止させる処置であった可能性が考えられる。付属屋 SGB56 は建物の南東前面に棟通りを合わせ配置されており、曲尺 6 尺を単位とすると桁行が 6.5 で 3 単位、梁行が 1.5 単位の 1 間構造であるなど特異な構造の建物で、東郭外家臣屋敷の北屋敷の主屋東側にある建物と位置関係が類似していることや幹線水路にも近いことから馬屋(厩)ではないかと考えられる。

土壌 今回の調査区では、内郭部や郭外家臣屋敷地では見出せなかった土壌が多く発見された。発見された土壌は、A 船底断面の浅い隅丸の矩形のもの、B 直壁構造で深い円形、矩形のもの、C 描鉢状で内部に砂砾を伴うものなどがある。A タイプの船底型は 2 間四方の木製品荒加工工房や金具加工工房とした建物周辺から発見され、SGK183 底部からは植物圧痕が SGK148 の内部では鉄滓が多量に発見されている。B タイプは、桶の据え石を作った SGK147 などから、桶などを設置した土壌、建物から離れ実際に水が湧き出た SGK153、156 などは素掘り井戸ではないかと考えられ、C タイプは SGK122 など A タイプの土壌に近接して見つかっており排水などを処理した土壌ではないかと考えられる。

3) 中世館以後の遺構

中世館層の上には瀬戸連房 1 小期の遺物を伴う水田造成層があり、この一帯は江戸初期には、「元和五年上組絵図」が示すとおり水田となり、正徳検地で葡萄畠と記載がある外郭域の H4G、H5G 地区の水田はメクラ排水施設を設け、6 尺から 7 尺間隔で杭穴が配置されていることから、葡萄畠遺構と考えられる。明治 29 年ごろから開始される中央線の建設工事に伴い、この一帯には人倉土木組の事務所が置かれたという伝承があり、掘立柱の仮設建物跡、土置き場遺構、レンガ敷きの炊事場遺構、便所、電信柱跡などが発見され、工事終了後に廃棄物を埋めた土壌などが発見されている。昭和 3、4 年頃西洋品種の葡萄栽培のためガラスハウスが設置されたという伝承地からは、ガラスハウスの基礎コンクリート壁、水抜き井戸、モルタル水溜跡、鍛冶場遺構などが発見されている。また葡萄栽培に伴う遺構としては 6 尺から 7 尺くらいの間隔で穿たれた竹籠の杭跡、針金籠の支線穴、剪定カスを埋める土壌(通称タコツボ)、メクラ排水施設などが発見されており、いずれも近世水田層の上から掘り抜いたものである。

V. 遺物

1) 中世館以前の遺物（第13,14図）

縄文時代早期末から中期の上器および石器が中世遺構に伴う検出されている。その後では、今回11世紀後葉の瓜削白磁壺(21)の破片が工房域の下層から発見されたが伴う遺構は確認されなかった。12世紀から13世紀にかけては、瀬戸中I、II期の鉢を伴う竪穴造構が確認され、周辺からは同年代の柱状高台の土師皿、常滑6形式(46)の甕などが発見されている。また今回の調査区の北西城で確認された中世水田層の造成層下から、14世紀代中葉の古瀬戸後I期の鉢、蓮弁紋青磁碗(27,28)などの破片が発見しており、同年代の常滑の7形式甕(47)もみられる。これとは別に、小片ではあるが、13世紀から14世紀の青磁洗、袋物(26)、蓮弁紋碗、中国製天目碗が発見されており、これらの遺物は、後の館に伴う信財である可能性も考えられる。

2) 中世館の遺物（第13～16図）

中世館に伴う焼物類ではロクロ整形の土師器皿や瓦質の擂鉢、鍋類が大多数を占め、陶磁器類は決して多くはない。

焼物類

土師質皿 通常整形で糸切底、砂粒を含む赤褐色胎土のものが主体で、大きさが直径19cm、13cm、11cm、9cm前後の特大、大、中、小の大きさのものがあり、多くは煤の付着が認められことから灯明皿として使用されたと考えられる。口縁部のつくりや胎上の違いから、大きく3類に分けられ、1類(1～4)は砂の含有量が少なく、外面底部直上に一条の内面口唇内側に一条の窪み線があげられ、2類(5～8)は外面底部直上と口唇外に二条、口唇内側に一条の窪み線があげられ、3類(9,10)は特大や大型が無くなり、口唇部を内側から外側に押し出すようにナデが加えられ、全体に薄手で口唇がやや尖りぎみで器肉が薄手であるなどの特色が見られる。第1期遺構では1類が主体で2類が若干混じり、第2期では2類が主体となり、3類は第3期遺構から含まれるようになる器種である。

瓦質土器類 第1期から2期までは灰褐色と赤褐色で土師器に近い緻密な胎土で、これに第3期以後砂粒を多量に含む胎土のいわゆる筒型内耳鍋が加わる。瓦質火鉢は、第1期遺構にみられる。瓦質擂鉢(39～41)は内部の筋目が疎らで、口唇が丸みをもつものが第1期に、第2期では内部の筋目が16分割となり、口唇が内外に若干張り出し、平らないし、若干窪みぎみのものが見られる。瓦質鍋(42)は、皿の口縁部を内側に折こみ突起や片口を備える縁折り外耳鍋が第1期から第2期まであり、第3期になると筒型内耳鍋(43,44)に入れ替わる。この他湯沸(45)などがあるが、第3期になると内耳鍋類が主体となる。

瀬戸系陶器 15世紀代の古瀬戸は、後II、III期の鉢、擂鉢、鉄軸耳付水注、天目茶碗などと、後IV期の灰釉腰折皿、天目茶碗(11,12)などの2群がある。最も多いのは15世紀末から16世紀前葉の大窓1期の灰釉端反皿(17～19)で内面に菊印花を持つものもあり、これに灰釉丸碗(16)、灰釉小丸碗、灰釉小杯、天目茶碗、水滴(14)などが伴っている。ついで多いのが16世紀中葉段階の大窓2期の灰釉丸皿で内面にソギを持つものもあり鉄軸棱皿(20)を伴っている。16世紀後葉段階の大窓3期になると灰釉稜皿、天目茶碗(13)、壺ないし瓶、鉄軸小壺(15)などの前半期の陶器にわずかであるが初山窯の擂鉢、鉄軸筒型甕など後半期の陶器がみられる。なお、大窓1期から3期の東郭工房域一帯から発見された陶器には漆巻きの痕跡(16)があるものが多い。さらに中世層上面から近世水田造成層にかけ、16世紀末の大窓4期の志野丸皿、天目茶碗や17世紀初頭の連房窓1・2小窓の黄瀬戸丸皿、志野丸皿、鉄絵皿などが見られる。

常滑 15世紀から16世紀中葉ごろまでの9形式(48)、10形式(49)、11形式の甕が発見されている。

舶載陶磁器 いずれも小片ではあるが、染付は15世紀から16世紀の皿B1群(34)、碗C群(32,33)・碗D群(31)、16世紀後葉の皿E群、碗E群が、白磁は白瀬戸のB群(22,23)、C1、C2群(24)、菊皿D群(25)が、青磁は15世紀の窑紋帶碗D類、端反皿(29)、移花皿(30)などがある。

土製品 輪の羽口、土鉢（37,38）、土師質皿を再加工した円盤（36）、有孔円盤（35）などがある。

焼成粘土塊 2次焼成を受け硬化した割り竹小舞の痕跡をもつ粘土が中世遺構に伴い散発的に発見されおり、特に大型掘立柱建物SFB10の上面や柱穴内、さらに幹線水路SGD34新路の末端から多量に発見されている。

金属製品

金属製品は角釘と鉄が主体を成し、飾り金具（55,56,57）、笄（51,52）、大形獨台（50）、小札（53）、刀子（58）、鉄釘（54）、刀装具などもみられる。なお、大型鉄製獨台は、幹線水路SGD34新路の末端に廃材や焼成粘土塊などと共に廃棄されていたものである。金属加工工具からは鉄滓なども発見されている。

石製品

石製品では石臼や砾石、碁石などがある。

木製品

木製品は第1期の堀、井戸、第2期および第3期の水路から多量に発見された。生活用具では、漆椀（59～62）、折敷（63）、箸（64～66）、楊枝（67）、曲輪、桶、箱、櫛（74）、下駄（70,71）、雪駄（72）、草履、柄、杖、卸板（69）、杵、シャモジ（68）、蓋などがあり、遊具では独楽（73）、独楽サイコロ、宗教関係用具では梵字塔婆（75）、人形（78）、刀型（76）、斎申（77）、建築土木部材では角材や板材・杭などがある。さらに、木製品製作にかかわるものとして、タガ縮め杵（79）、楔（80）、鉈台（82）、帯、ヘラなどの道具類と多量の削りカス、ヘギ板材、割り竹、未製品の板材、碗荒型（81）、漆が付着した布などが発見されている。漆椀類に使用された漆には光沢のあるものとやや鈍いものの二種があり、光沢のあるものは少ない。椀は高台の高いものと低いものがあり、内面は朱塗りで文様は無く、外面黒塗りの上に朱漆で花鳥紋や鶴亀紋、六曜や花菱、亀甲紋など紋所を園内に大胆に描くものなどがあり、底部高台内に朱漆で菱井桁や一字文字（60）線刻紋をもつものもある。漆椀にはクリ、キハダ、ヒノキ、ハンノキなどさまざま樹種が、曲輪や折敷、箸にはヒノキ、建材や杭などにはサワラやマツ、スギなどが使用されている。

植物遺存体

植物遺存体には、タケ、ウコギ、ヒノキ、サワラ、ヤナギ、マツ、カバノキ、トネリコ、ニワトコ、マタタビ、クリ、ヌルデ、ムクロジ、モモ、ウツギ、ヤマウルシなどがあり、種子ではカヤ、イヌガヤ、アカマツ、オニグルミ、ヤマグワ、チャノキ、ネムノキ、ウメ、スモモ、ヒメグルミ、カヤ、オモダカ、イネ、カヤツリグサ、ミズアオイ、サナエタデ、アカザ、ナデシコ、カタバミ、ヒョウタンなどがある。

動物遺存体

第1期の井戸SGE06からは炭化米とともに鳥骨や魚骨（マグロ、タイ）などが発見され、第1期の堀内底からは馬の下顎骨、第2A期の幹線水路SGD34旧路からアワビなどが発見されている。また自然遺物としては、堀の堆積土層からタニシや水生昆虫、幹線水路中からはカワニナなどが発見されている。

3) 中世館以後の遺物

近世水田の造成層からは17世紀初頭の連房窓1・2小期の鉄絵皿片が、用水路跡からは江戸時代中期の陶磁器類、葡萄畑に切り替えるにあたり設置された目暗排水路からは江戸中期から近代の遺物が見出されている。また、明治29年から開始された中央線建設工事に伴う遺物は、掘立柱建物の柱穴から角柱材、また柱の抜き取り穴や廃棄土塊中からは擂鉢、ほうろく、鍋、こんろ、碗皿類、香炉、ティーポットの蓋、鳥餌入れなど陶磁器類やグラス、ボトル、薬瓶、ランプのホヤなどガラス製品などの生活用具、さらに、ダニエル電池の外包や鉄製工具、鉄滓、釘、レンガ、土管、板ガラスなどの遺物が発見され、便所遺構からは貝製ボタンや溜め板材の接続用丸釘などが発見された。さらに昭和初期のガラスハウス跡からはL形鉄骨材、板ガラス、パテ、鉄切金枠などが見出されている。

VI.まとめ

勝沼氏館跡内郭部の調査で、勝沼氏館跡第2期遺構は、井戸に頼らず東側の外部からの引き水により水路や水溜が整備されていること、郭内がその機能により扇状地の傾斜地形に応じ雛壇状に造成されていることなどが特色として把握された。内郭部東側にあたる外郭域調査では、内郭部への引き水経路の解明と、外郭あるいは郭外の階段状造成の把握と東郭の東辺防護施設の解明が大きな目的であった。この当初の目的は、先の外郭域調査概報で示したとおり、現在館の北辺に沿い流れている深沢用水（柏尾堰）の旧路の発見と郭内への分水方法の特定され、雛壇状造成も土地利用区分と深くかかわって外郭域でも確認することができた。さらに、武田氏の時代、郭外家臣屋敷の建物が掘立柱構造であり、内郭部の館主の礎石立建物の明確な家屋構造の違いが明らかになるなどの成果を得ることができた。加えて、内郭部では3時期4小期の時期区分が限界であったが、郭外域では建築遺構や幹線水路との関係から3時期6小期の細分が可能となり、年代についても内郭部より豊な陶磁器類の発見により、第1期が15世紀、第2期が16世紀前半、第3期が16世紀中葉段階と特定することができた。

平成8年度から17年度調査では以下のような成果を得ることができた。

縄張敷地造成関係

1. 第1期外郭帯は、近接2重堀構造が採用されており、東側に拡大整備が行われた。
2. 第1期外郭帯の東辺のほぼ中央に東門が設置されており、これが館の正門である可能性が高い。
3. 第1期の正門の外側には屋敷割りが行われていた。
4. 第2期段階で東郭、北西郭、北郭は拡幅整備され4郭構造となった。
5. 第2期段階では北西郭、北郭側が館の正門となり、東郭側は搦め手門となる。
6. 第2期段階の東郭は、北側が職人工房、南側が内郭部飲料水供給施設として利用区分されていた。
7. 第3A期段階で内郭部外周屈曲部が埋め立てられ、郭内屋敷が整備され、この段階で城砦としての機能が求められなくなった。
8. 第2期段階以後の外郭域の雛壇状造成は内郭部と同様、第1期段階の段上造成を踏襲したものである。

幹線水路・井戸関係

1. 第2B期段階で幹線水路は、東郭を2分するように改修され、早い段階で、水路内に木製品の製作にかかるる大量の廃棄物が投棄された時期が存在する。
2. 第3A期段階で幹線水路の改修が行われるが、この水路もある段階で、郭内屋敷建物を焼却し一部を投棄した時期が存在する。
3. 第2B期、第3A期の幹線水路も末端から埋設による給水管路を利用している。
4. 第2A期の幹線水路には大規模水溜を伴い、水溜を利用して水質浄化機能を備え、第2D期段階では水路に溜が設けられ、堆積した土砂の浚渫、廃棄まで考慮した水路を利用した水質浄化機能を備えていること。
5. 第1期段階では内郭部でも井戸が検出されており、郭外家臣屋敷でも石積井戸を確認することができたが、井戸の掘削深度の違いにより、第1A期段階の途中で深沢用水の開削が行われた可能性が考えられる。
6. 第2期段階でも家臣屋敷は石積井戸、職人工房城は素掘り井戸と構造的違いがある。

建築関係

1. 第2期段階では東郭の北半、館の北東隅部分から木製品製作にかかるる遺物と共に、郭外家臣屋敷に比べ使用部材が一回り小さい居住建物、工房建物が廃棄土壠、素掘り井戸など付属施設併せ機能的に配置された郭内職人工房城が整備されていた。
2. 第3A期段階で設置された郭内屋敷建物は、勝沼氏館跡の調査で初めて東西棟の居住建物として確認された掘立柱建築で、建物の骨格構造の復元推定が可能であり、桁行を3単位飛ばしとし、下層を居室空間に取り入れ、切り妻構造を取るなど、17世紀初頭の武家住宅とされる山梨市上野家住宅の想定される初期構造と共通点が窺え、

甲斐の切り妻民家の発展過程を知る上で貴重な遺構と考えられる。現在までに主屋と馬屋が発見されたが、今後、門や蔵など屋敷内の施設配置の全貌が明らかにされれば、甲斐における掘立柱構造の武家屋敷の配置構造解明に大きく寄与すると考えられる。

3. 郷外家臣屋敷の調査で、主屋となる掘立柱建物群は、基準単位方眼（1単位は曲尺の6尺に近い値を取る）と柱配置の関係から、以下の4類に分類された。

- 1類 梁行2単位で中間柱が無い、平側のみ柱が建つ平側柱建物。
- 2類 梁行3単位で中間柱が無い、平側柱建物。
- 3類 梁間は2.5単位としその2分した位置に柱（棟持柱）を建てる側柱建物。
- 4類 梁間は2.5単位または2単位としその2分ないし3分した位置に柱を建て、内部区分柱をもつ建物。

先の調査では、1類建築は小規模建築だけであったが、今回の調査で郊外の上級家臣屋敷建物が確認されたことにより桁間も2単位ごとに柱を建てた建物であることが明らかになった。また、1類から2類への変化は建築技術の進歩として理解できるが、2類から3類への変化は技術的進歩だけで説明するには無理があった。しかし、今回の調査で東郭内屋敷の中心建物が発見され、桁行8.5単位という大規模なものでありながら梁行は2.5単位を2分する位置に柱を建てていることが明らかになったことにより、3類建築が登場する背景には家臣の主屋梁行を2.5単位以下とするような制限の存在を考慮せざるを得なくなつた。武田氏による領国統治の方法として住宅建築にかかる規制の存在は、文献資料では明らかにされていないが、かなり厳格に実施された可能性を示唆しているといえる。

遺物関係

1. 出土陶磁器の調査検討を受け、館の年代はほぼ確定してきた。さらに、第3B期段階の建物に瀬戸大窯第3期後半の初山窯の磁鉢や碗を作ることが明らかになり、永禄3年（1562）勝沼氏が滅ぼされた後も家臣屋敷は存続していた可能性が考えられる。
2. 第3B期以後、瀬戸大窯第4期前半にあたる1590年前後の遺物がほとんど無く、第4期後半から連房窯第1小期の志野や鉄絵皿が水山層の直下から発見されることから、武田氏が滅亡した天正10年（1582）から文禄年間位まで人の出入りが無くなり、慶長年間（1592～1610）頃から水田化あるいは畑地化が始まったと可能性が考えられる。
3. 東郭幹線水路巾より発見された木製品や木製品、肩、製作工具などは、中世館の内部に設けられた職人工作の実態を解明するおおきな手がかりとなり、同時にその廃棄とその後の水路利用の様子は館で起こった異常事態の存在を示してくれた。
4. 多くの食用植物の種子や骨、貝などから食文化の一端が明らかにされるとともに、花粉分析等で館を取り巻く植生環境を復元できる資料が得られた。
5. 堀や水路内から斎巾や塔婆、型代、馬骨などが発見され、中世館に伴う祭祀の一端が明らかになった。

館と歴史

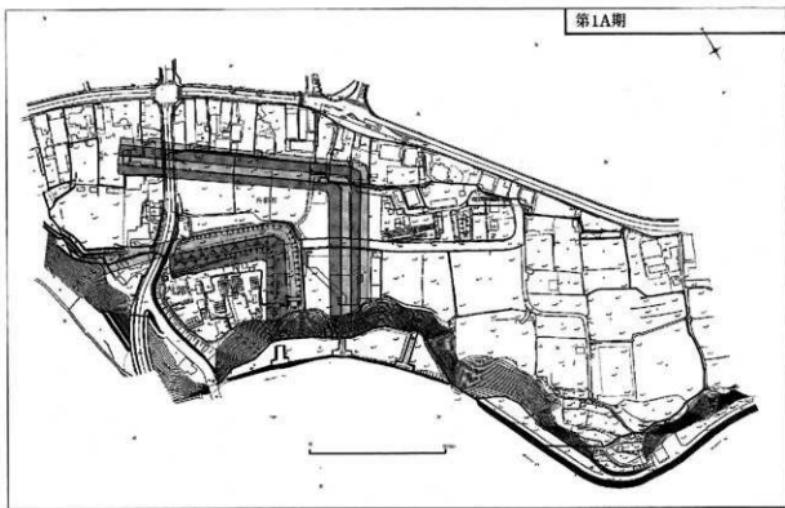
- 1.15世紀代の第1期遺構は、だれの館であったのかは記録伝承も無く特定できないが、15世紀の甲斐は、守護武田信満が上杉禪秀の乱にかかり、関東に出陣し、鎌倉方の追討を受け、館の南側を流れる日川の上流天目山で応永24年（1417）自害して以後、守護の地位をめぐり武田氏と逸見氏、跡部氏が争う時代が永享10年（1438）まで続き、一端は安定したものの、長禄元年（1457）再び武田氏と跡部氏の争いが寛正6年（1465）まで続くなど戦乱の時代である。第1期の館内郭部では、礎石建物で守護などが採用した建物配置が行なわれていることなどから高い地位の武将の館であると想定され、戦乱の時代に対応するよう要害の地を選び外郭帯に近接二重堀を用いるなど威嚇的性格も強いことなどが明らかになってきた。また、第2期館以後現在に及ぶ深沢川から取水し、柏尾山大善寺の境内を通過する深沢用水堰が第1A期の途中で削削されたことも、第1期の館の主が高い地位に

あった人物であることを示唆している。

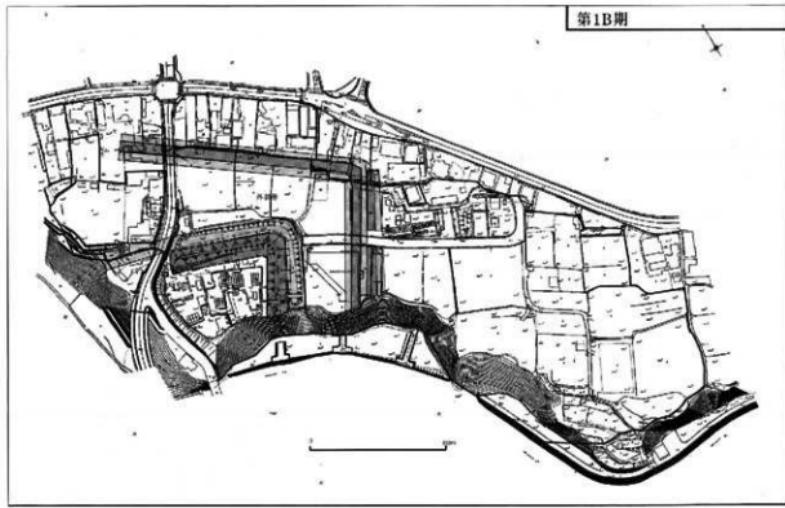
2. 第2期の館は、この第1期館を改修し構築されたもので、遺物では15世紀末から16世紀前半の年代が想定され、勝沼信友が改修したとするなら兄武山信虎の甲府に移転した永正16年(1519)が妥当ではないかと考えられる。繩張りなどからは、兄信虎の国内統一期を反映した城砦として性格が色濃く見える館である。第2期のなかでも第2B期段階で起こった内郭部飲料水路への廃棄物の大量投棄は、その後廃棄物の上部を撤去し、しばらく水路を使い続いているなど異常な経過がうかがえ、天文4年(1535)8月に勝沼信友が都留郡山中で北条軍と戦い討死した事件との関係が注目される。さらに、この直前に行われた第2B期の幹線水路の付け替えを伴う大改修は、天文2年に川越上杉氏の娘が武田晴信と結婚しており、この嫁入り行列が郡内をにぎにぎしく通過したとあり、この道中警護を郡内目付けで、しかも叔父にあたる勝沼信友が取り仕切り、この館がその宿泊施設として利用された可能性が高く、これに伴う大規模改修と想定される。
3. 第3期は、内郭部では石組み庭園とこれに接した接客用建築が整備され、外郭では、近接二重堀の一部が埋め立てられ屋敷地に改修されており、館全体から戦闘的色彩が薄くなっている、国内の安定した社会情勢を反映したものと考えられる。この時期、勝沼氏がどのような地位にあったのか、また館がだれの館であったのかは、議論の余地が残されている。これは、天文14年(1545)に「勝沼ノ柏州」「勝山記」とあり、天文19年(1550)に実施された大善寺本堂屋根修理勧進興行の執行者が大善寺文書に「当寺檀那今井相模守信市、嫡男安芸守信良」とあることに起因している。柏尾山大善寺は館の飲料水用渠の深沢用水が通過しており、館とは密接な関係を有していたはずであり、大善寺文書相模守記載部分は手が加えられたものであることが確認されたものの、系図では安芸守となっている勝沼信元が相模守を名乗っていたという確証も得られていない。ただ、仮に勝沼氏滅亡後、大善寺文書に意図的に修正が加えられたとするならば、天文19年3月の勧進興行、天文24年(1555)2月の落慶法要に勝沼氏は深く係っていたはずであり、第3A期の改修は、この落慶法要等大善寺を訪れた武田晴信以下の接遇のためと想定することもできる。なお、東郭内に設置された屋敷は、甲府武田氏館に武田晴信の嫡男義信が駿河今川氏の娘を迎えるため天文20年(1551)に設置された西郭に類似性が求められ、勝沼信元の嫡男信就の屋敷である可能性を考えられる。
4. 永禄3年(1560)11月の勝沼氏滅亡に伴うものか、内郭部では中心建物の礎石が抜き去られており、北西門の石垣が崩され通行不能な状況が確認されている。東郭屋敷においても主屋が焼却され柱根まで抜き取り、内郭部飲料水路にその一部を投棄する行為があったことが確認されており、これらは破壊処理の結果とも理解することができる。

以上、勝沼氏館跡の外郭調査は、文献記録と現場状況の対応関係が求められこと、武家と職人との関係、主従関係による建築構造の違いなど、興味深い成果を得ることができ、今後この成果を生かした環境整備を実施していきたい。

第1A期

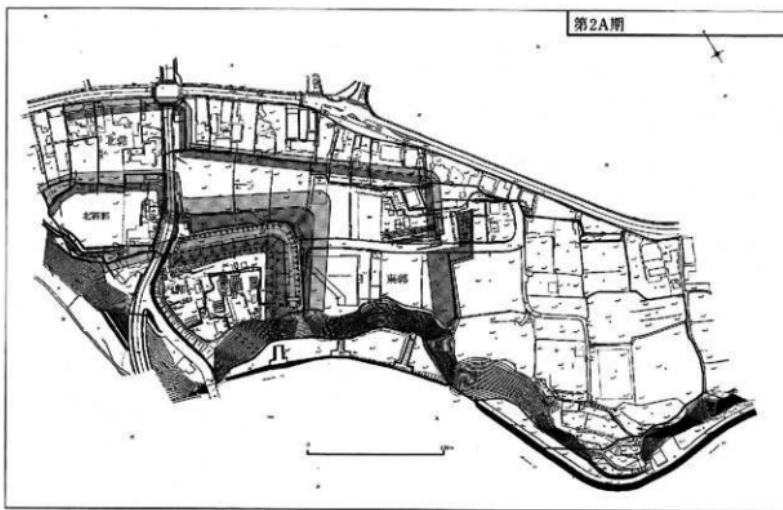


第1B期

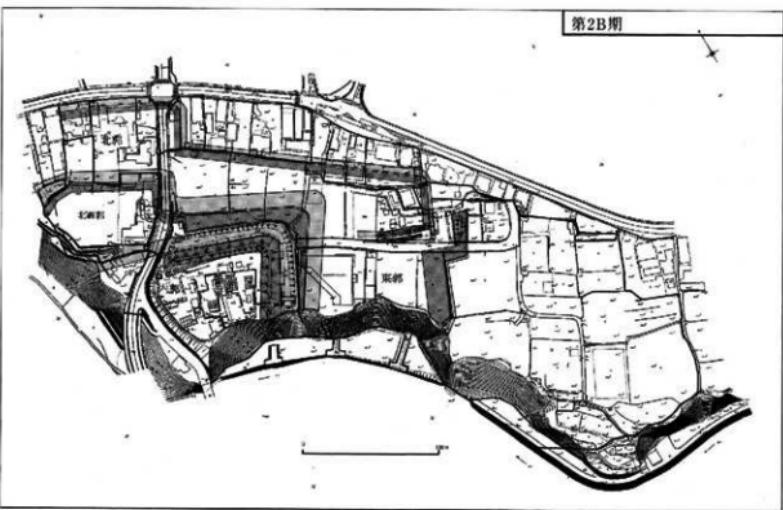


第3図 勝沼氏館跡縄張図(1)

第2A期

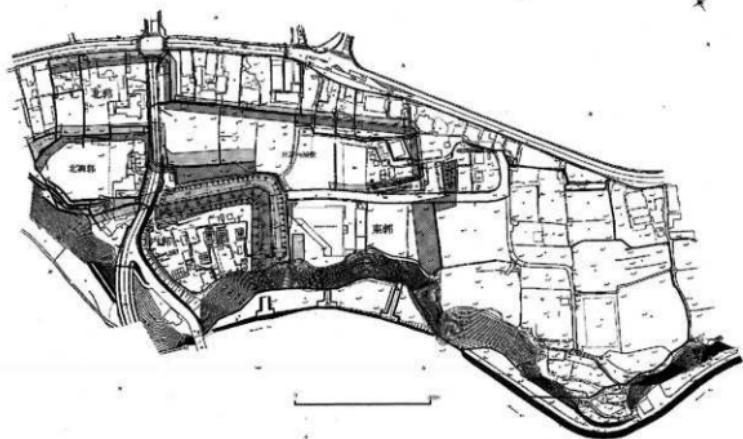


第2B期

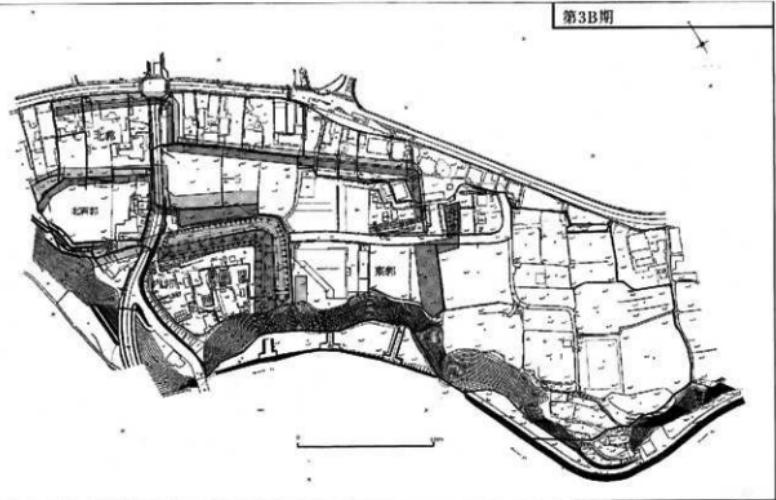


第4図 勝沼氏館跡縄張図(2)

第3A期

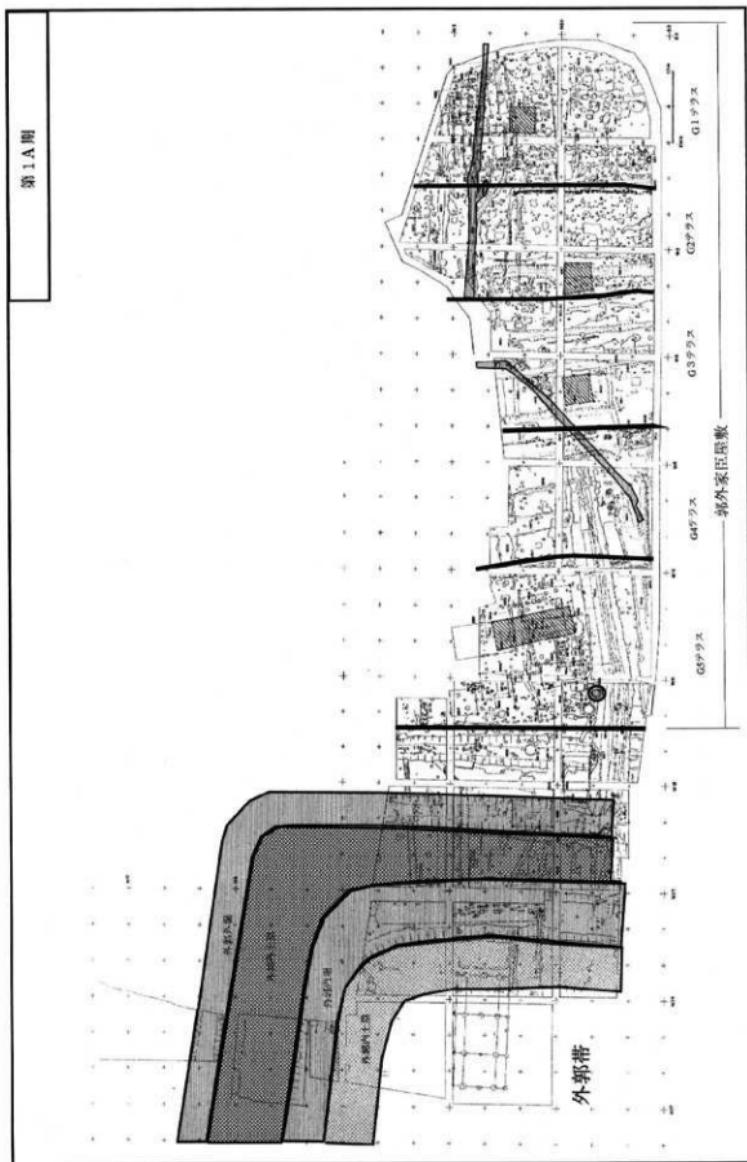


第3B期

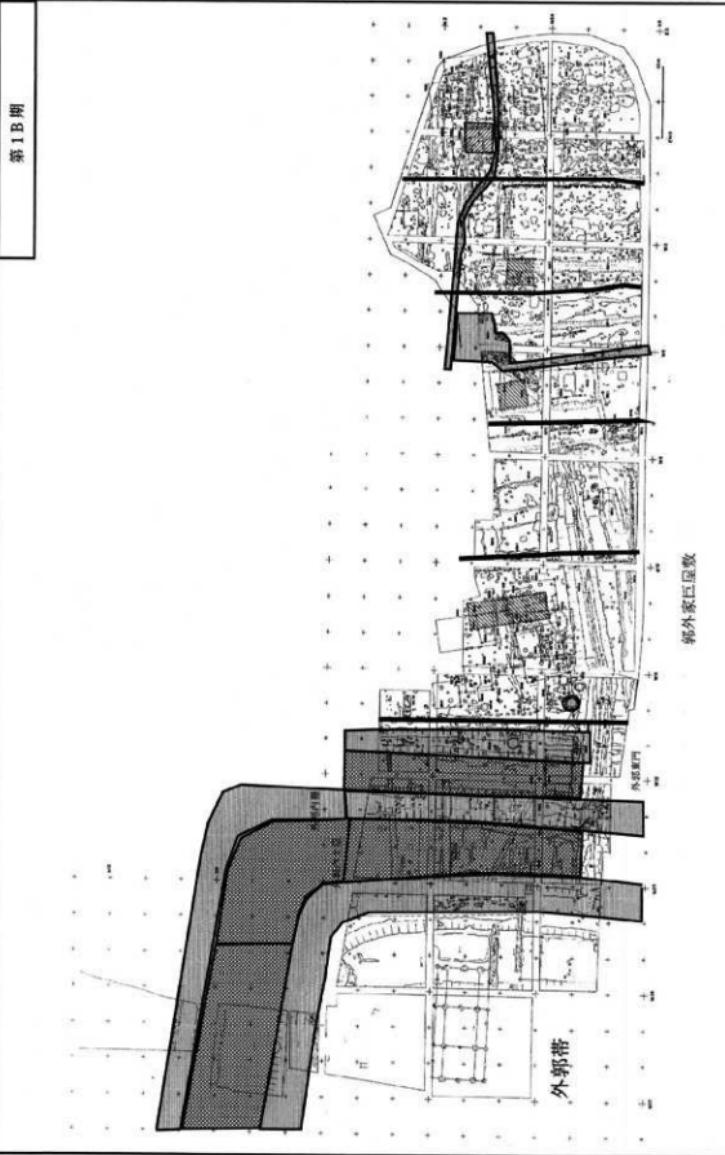


第5図 勝沼氏館跡縄張図(3)

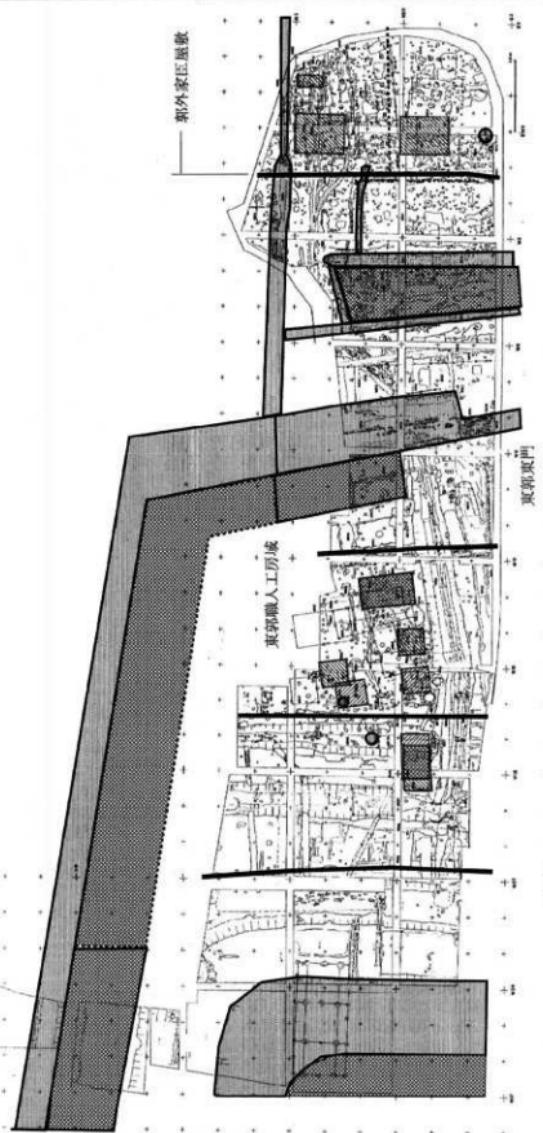
第6図 外郭域時期別遺構図(1)



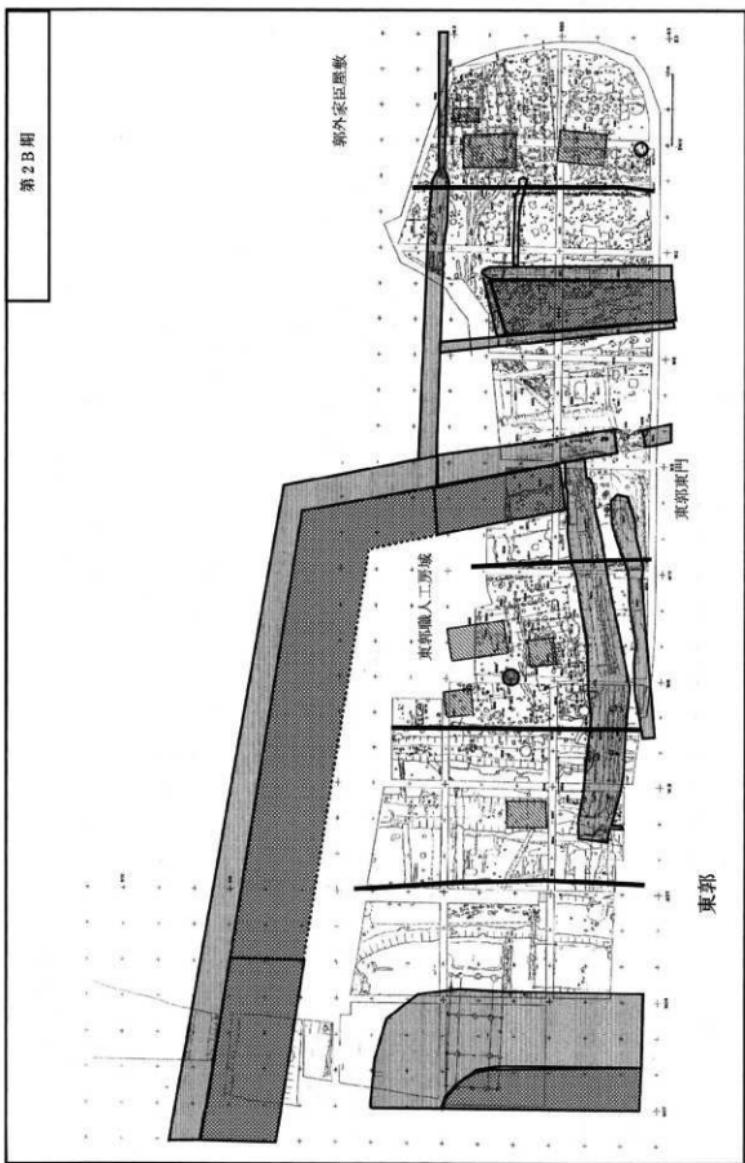
第7図 外郭域時期別遺構図(2)



第8図 外郭域時期別遺構図(3)

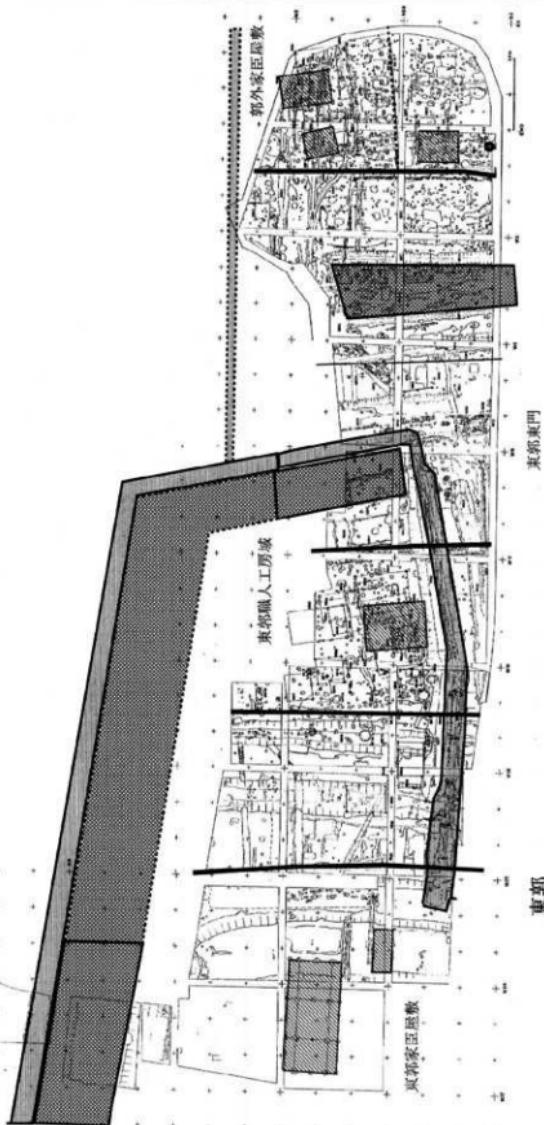


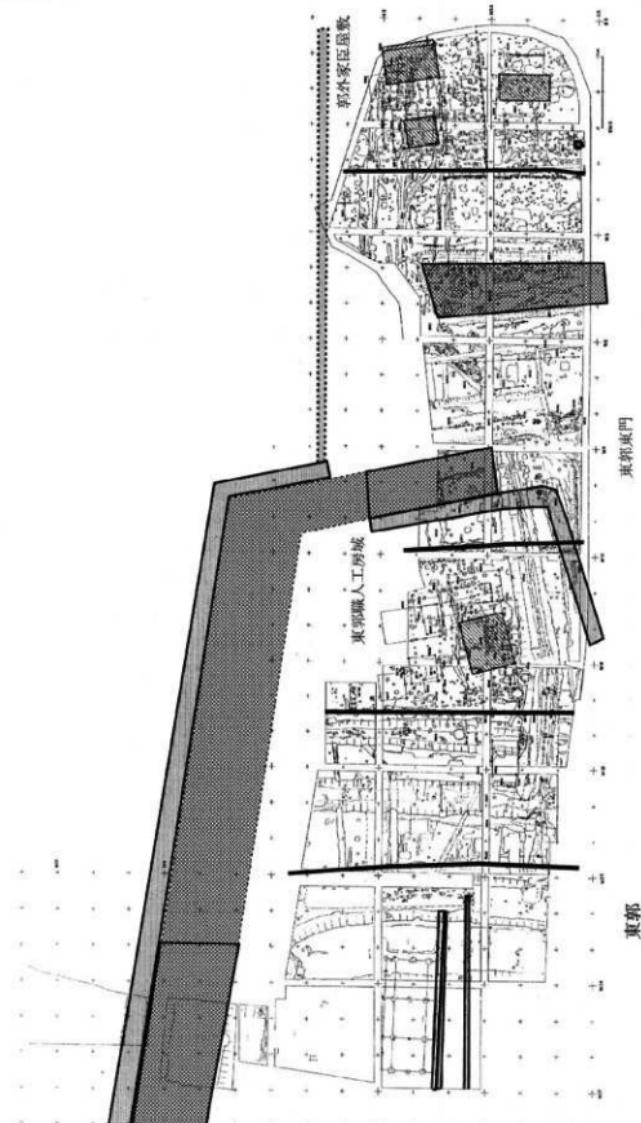
第9図 外郭城時期別遺構図(4)



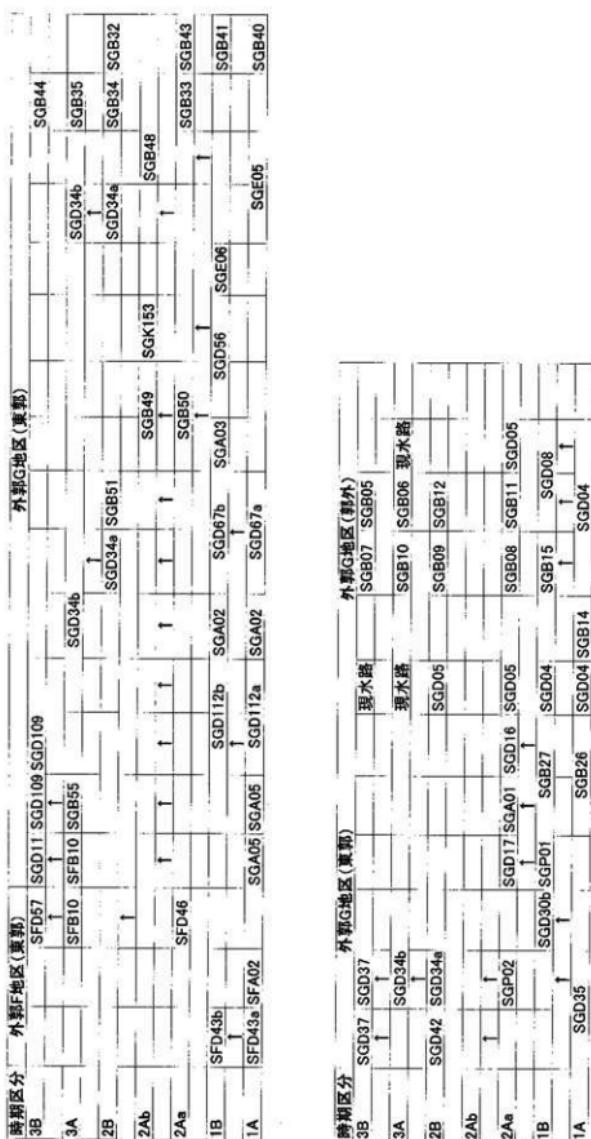
第10図 外郭城時期別遺構図(5)

第3A期

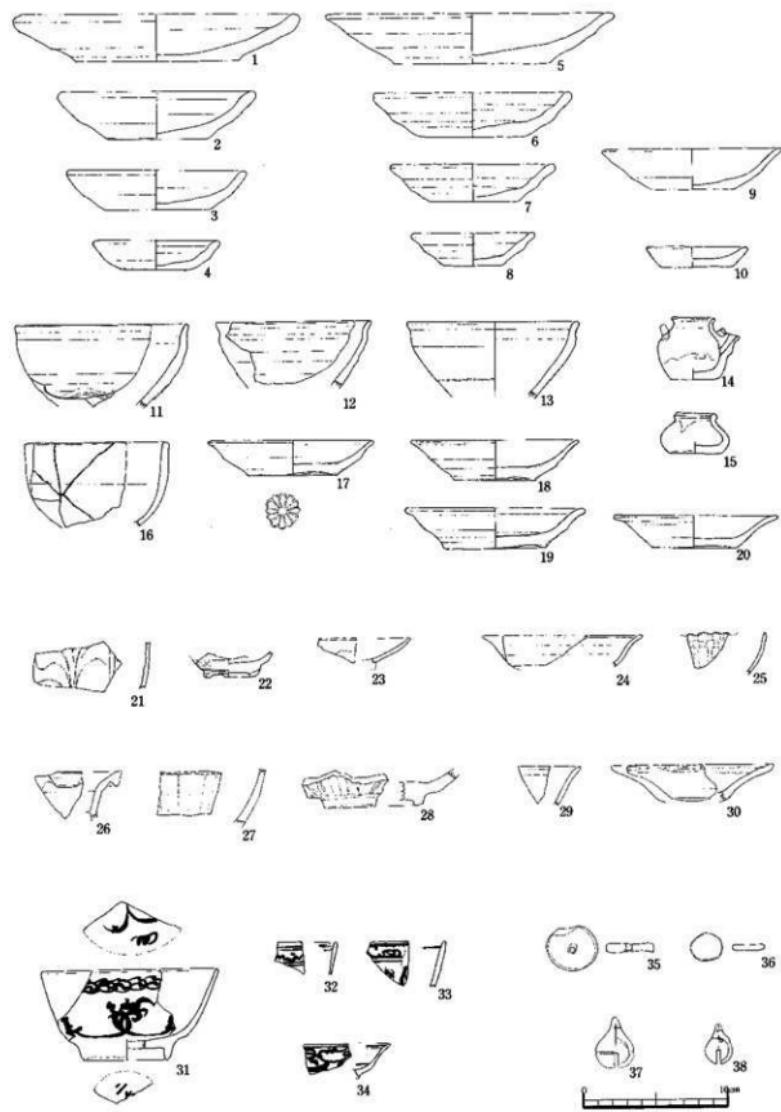




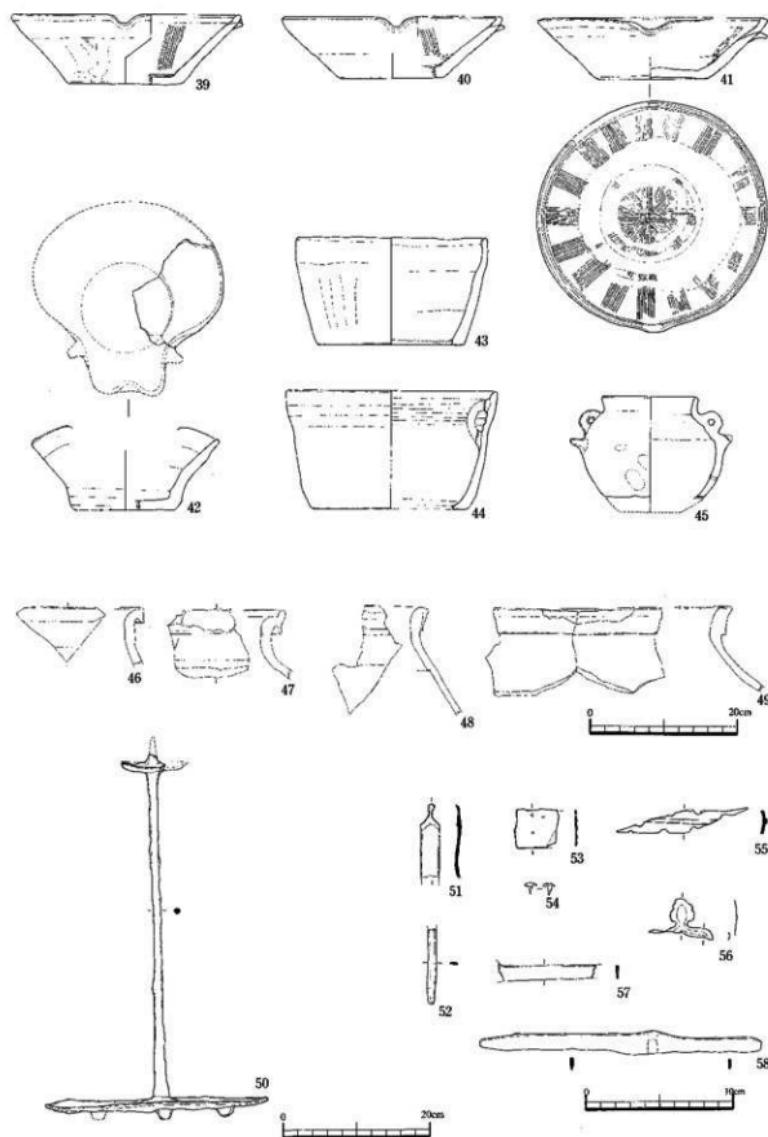
第11図 外郭域時期別遺構図(6)



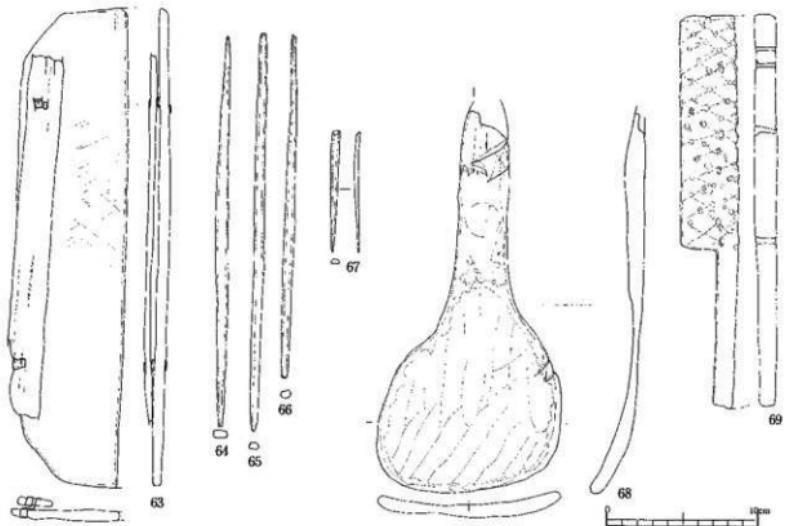
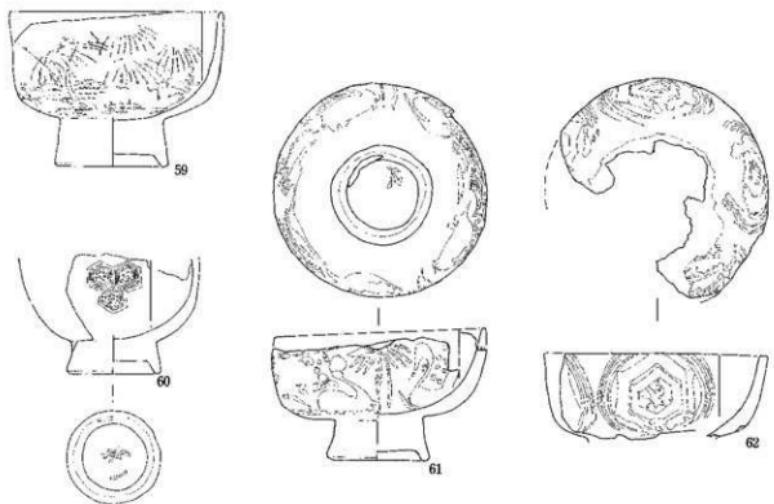
第12図 外郭域遺構重複関係図



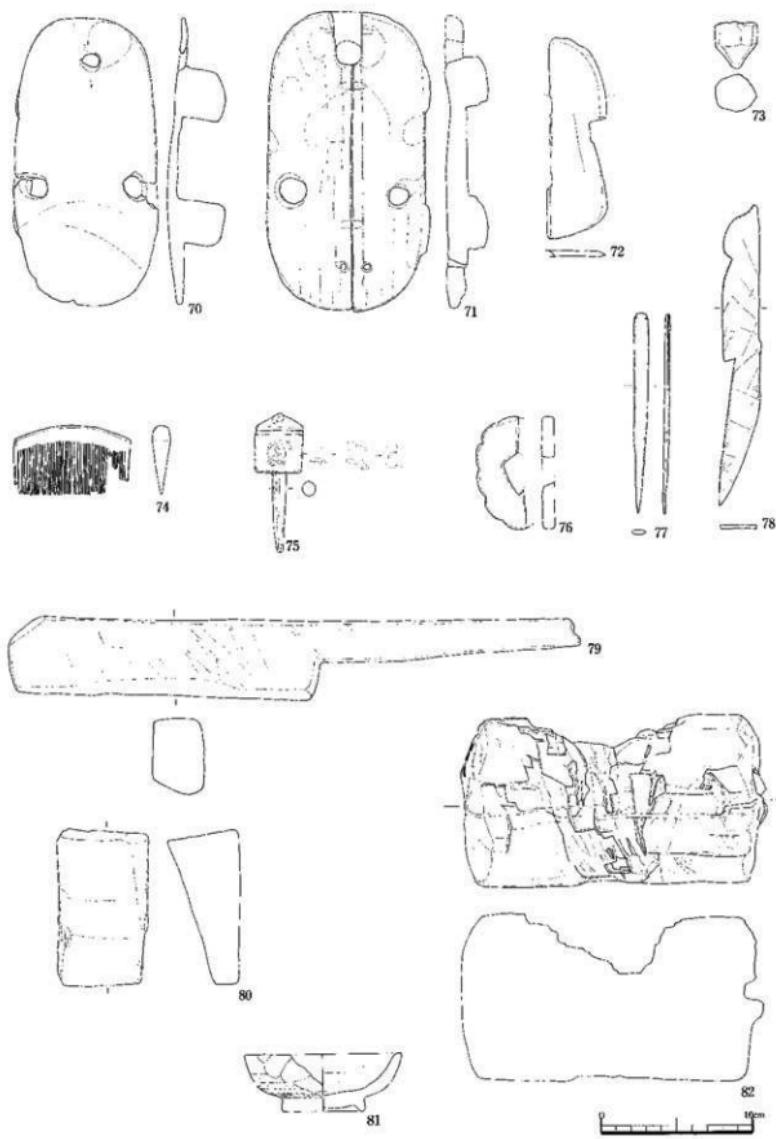
第13図 出土遺物実測図(1)



第14図 出土遺物実測図(2)



第15図 出土遺物実測図(3)



第16図 出土遺物実測図(4)

報告書抄録

報告書概要

ふりがな	しせきかつぬましやかたあと
書名	史跡勝沼氏館跡
副題	平成8~17年度外郭城G・F地区発掘調査概報
シリーズ名	甲州市文化財調査報告書 第1集
著者名	室伏徹
発行者名	甲州市教育委員会
編集機関	甲州市教育委員会生涯学習課文化財担当
所在地・電話	山梨県甲州市塩山上塩後 TEL.0553-32-1411
印刷所	(株)天野印刷所
印刷日・発行日	平成18年3月31日

遺跡概要

遺跡名	勝沼氏館跡
所在在地	山梨県甲州市勝沼町勝沼2515-1外 25,000分の1地形図 石和 位置 北緯35度39分33秒 東経138度43分55秒 市町村コード 19213
主な時代	室町時代・戦国時代
種別	中世武家館
主な遺構	堀3条、土塁4条、幹線水路3条、井戸5基、掘立柱建物18棟
主な遺物	中世土器、陶磁器、木製品、金属製品、石製品、動植物遺存体
調査期間	平成9年1月6日~平成18年3月31日

山梨県甲州市 史跡勝沼氏館跡

—平成8~17年度外郭城G・F地区発掘調査概報—
2006

編集 甲州市教育委員会生涯学習課
山梨県甲州市塩山上塩後
TEL.0553-32-1411
発行 甲州市教育委員会
2006(平成18)年3月31日
印刷 (株)天野印刷所







